

極秘

~~極秘~~

北支那支那ノ一部改組下

北支那支那ノ一部改組下

ニシテスル

昭一

高麗... 今政府ノ改組ハ一級ニハ...
ノ改組シニ... ナイトノ定...
カニシテ... ハ本... ニシテ...
ナル... ニシテ...
ラ行ヒタルガ如キモ...
ニシテ... アル...



9.6.30

9.5

0532

内務テオフィロ、シソン

パンガシナンの人小學校の先生から身を起し、知事、上院議員、議院御事となり、聯邦政府の末裔に留防大臣をされたことがある彼は其出世をケソンに預ふ歳非常に多かつた。大東亞連により軍政が布せれると同時に會計官室議長、獨立後は司法大臣に任命せられ今國內務大臣に榮耀した。

職に圓滿を差格の持主で世襲りの器用な人である。又人間も正直で居心深いから失敗もなほ代り短期的な新機軸を出す人でもなほ従て大なる期待を待つことが出来なほ。現在の秘書官大東亞連アントニオ、シタン博士は彼の子弟である。

カピドウ運送船

アルバイ州の出身。本年六十才で運送船牙畢士令の會員である。去年ラウレル氏の法律事務所聯合員であつた關係上ラウレルが大統領となるに及び書記官に起用されたものである。マニラ大學の法律部部長である。

もしたことがあり、非常に熱病漢人で皇軍マニラ入城當時副司令マニラ商會社の社長であつたが、昭和十七年一月中旬刻度病へ罹りし約一年間中央へ消息を出さなかつた。一寸氣取直して西遊舟の貴族風な風がゐる。一言にして彼を評すると「緩進」の言辭が一言尚書である。經濟とは全く縁のない人であるがラウレルと親分子分感から經濟界になつたと見るが適評であらう。

パエス交通相

新聞員中でこの人は最も非難の多い人で所謂道村適所である彼は土木局長として、又マニラ鐵道の支配人を永年してゐたので、交通事業に精通してゐる。比領實業光局を組織する爲日本の鐵道堂から當時副局長光局の副長であつた渡田淺氏を招聘したのも此の人である。彼は時勢で良吏であることは定評がある。リガール州出身本年三十七才。パレヅス法相。

イロカノ地方アラ州の出身六十才。彼は偉々、氣骨の士で比領實業

の准兵である。陸軍警員、陸軍院内總務官、交通大臣と云々
の職務の持主である。近來支那として見ると、その職務が
如何なるに出るもその職務が戻してあるのかも知れない。
アペリヨ氏編纂

アペリヨ氏はラウレル大尉領の官職に入り、陸軍院で在任三十六才
の青年である。日露戦時代ラウレル大尉の下で軍医官を勤めていた。
バルガス氏は日露戦時代に任命されると、陸軍大尉官を勤めてアペ
リヨ氏に自らの官職を立てラウレル大尉領も同様にした。氏がアペリ
ヨ氏に任命された後、一先官職入の如く見へるので、バルガス氏は日本へ
帰れて行くことを望んだので、レクタ大尉領を任命して、陸軍院
軍医に任命した。陸軍院をオキバキ大尉領するので、軍医として立
派なものであった。

今回ラウレル氏の官職を授けられたこと、陸軍院で任命されたこと、ア
ペリヨ氏の任命した大尉領として陸軍院の領有官を勤めたものである。ア

ベリヨ警備官は酒ネグロスの園で大酋長の墓を掘り出さる。

全盛期を越えロハス時
今度更めてロハスを三浦大酋長にすることが決まされたが、彼を
監禁に入る前からマラカニヤンで獄中が大酋以上の勢力を保持して
た。

従来比島政府の人事はレクト外相アラス等がラウレルから提案
されてやつてゐたが、今年昔から大統領は蓋してロハスに相替して人
事を決定することとて、前記兩相は心中する筈からざるものなる
あらしい。

ロハス人事の更替は、日軍の侵入を恐れて日軍の人々を無罪しようとした
ことである。この態度で、日軍の侵入を恐るる人々の日軍無罪は、六月に
其の自決を遂げられて元米比島の強固な人々を其の終極に無罪し
てゐる。

従来比島人になつて、日軍の侵入を恐るる人々の出来た人で、インテリ青年

の間に大の信願を得てゐる。この人は大高麗國争勃發當時少佐として従軍し、直ちに中佐に昇進しマツカアーサーの幕僚となり米軍と比島軍との連絡官をしてゐた。昭和十七年の初秋ミンダナオ邦ダンサランで修養となつた時に代参まで昇進し大統伊代として大蔵を五ツも兼ねてゐた。マニラへ來てから幾時かの知れぬ病氣にかゝつて非常に弱つてゐた。比島の軍醫の診察で候参并給被らうと言ふことであつたが、東條首相から送られた某軍醫の意見で療養を命じることが確定しそれから急遽に修養を命ぜられた。修養へ出たりゴルフをやる程はくたつてゐる。修養はマニラに居つた當時は喜びを懐へば入らぬと言つてゐたが、修養の如く金盞薬に入り、明治天皇等と交つたこと、修養の心算の變化か、修養の認識か、修養の自由があるか、修養の心算を討究する修養で修養い。